

## 「Oh!スピリチュアル」

明星学園 宮下 智

「虫の知らせ」という言葉があります。いわゆる第六感、どちらかと言えば悪い予感がするときに使われる言葉です。皆さんは、信じていますか？今回はそんな第六感、そして霊的とも思われるような感性についての話をしてみたいと思います。そんな馬鹿なことなんかあるはずないという方も、ちょっと眉に唾をつけながらお付き合い下さい。

今から三十年程前のことになりますが、こんなことがありました。その頃、まだ児童入所施設だった明星学園には、六歳になるA子ちゃんという愛くるしい女の子がいました。入所当時から夜泣きが多かったA子ちゃんですが、夜中に目が覚めた時に、添い寝をしたり、飴を舂めたり、宇津救命丸を服用したりしながら支援をしていました。ところが、ずいぶん夜泣きが少なくなったなあと思っていた頃に、また強烈な夜泣きが始まったのです。一週間ほど職員も手を変え品を変え全力で支援しましたが、夜泣きは激しくなるばかりで、添い寝も飴も宇津救命丸も全く役に立ちません。三十年前のことですから、気が利いた心のケアを施すことができるような力は私にはありません。止む無く、「虫の知らせ」を信じていた私ではありませんでしたが、「なにかお家で悪いことが起こったのかもしれない」と家庭に電話をしてみることにしたのです。

すると電話口に出たのはA子ちゃんのおばあちゃん、お母さんの様子をと尋ねると、母親に当たる人は家出をしてしまって、もう家にはいないというのです。そこで、いつ家出をしたんでしょうか？と確認すると、おばあちゃんが教えてくれたその日は、なんとA子ちゃんの夜泣きが激しさを増した日だったのです。

偶然の一致と考えるのには、ちょっと無理がある日付けの合致でした。A子ちゃんは、本当に悲しくて毎晩泣いていたのでした。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

次は十七～八年前のできごとだったと思います。B男さんが突然不穏状態になり怒りの表情で一晩中歩き続けます。心配事があると不眠状態になることが確かに多いB男さんではありましたが、その時は明らかに日頃のB男さんに似合わず、その表情は怒りに満ちていました。三～四日間だったと思いますが、できる限りの支援を提供しましたが、一向に怒りの表情は変わりません。万策尽きた私たちは家族に救いを求めました。「なにか変わったことがないですか？」すると今まで数十年面会に来たことがなかった兄弟が今度の行事に面会に来るというのです。「すいませんが、面会に来ることが決まったのは何日のできごとですか？」と尋ねると、教えられたその日は、B男さんが突然不穏になった日と同じだったのです。この日付けの一致も偶然とはとても思えないものでした。

「相談もしないでそんな大事なことを勝手に決めないでよ！」それがB男さんの怒りの原因だったのです。何十キロの距離を越えて彼の怒りは届けられたのでした。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

C男さんが幼少期に、おそらく三歳頃のできごとだったと思いますが、亡くした母親の初めての墓参りに出かける時のことです。十年ほど前のできごとでしょうか、その頃の私たちの支援はさすがに進化を遂げていました。墓参りには、どんなことをしたいのか、本人と相談しながらその形を決めることができるようになっていました。花束に、お供え物、これが定番のかたちです。さて、お供え物の相談です。その時彼は饅頭を選択したのです。父と遠く離れ、母を亡くしている彼は、高遠にいるおばあちゃんの家身に身を寄せていました。高遠と言えば高遠饅頭だけど、確か彼のお母さんの出身地は九州、高遠饅頭というのは、ちょっと不思議な選択でした。「お母さんの好物だったのだろうか？」「でも、たとえそうだとしたら三歳の彼がそれを覚えているのだろうか？」間違っただけのお墓にお供えするわけにもいかず、私たちはおばあちゃんに確認の電話を入れることにしました。「あ、う、C男さん、お母さんのお墓参りにお饅頭を選んでですけど、なにか思い当たることありますか？」するとおばあちゃん、「うちの嫁は本当に高遠饅頭が好物だったんですよ」と。彼の母親に向けた思いの強さを、その記憶力に対する驚きとともに感じた一瞬でした。C男さんの母親は白血病で急逝しています。そして、「バイバイ」という別れの挨拶に毎回パニックを起こしている彼です。彼の心の中には高遠饅頭

を美味しそうに頬張る母の姿が今でも生き生きと息づいているのでしょう。あまりにも悲しい現実でした。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

D子さん、伝わらない想いがあるときには、いつでも「ワッホー、ワッホー」と大声が出ます。未熟児網膜症の彼女には視力がほとんどありません。ある夜、彼女は身体を揺らしながら職員室に入室すると、「ワッホー、ワッホー」が始まりました。こんな時間に始まる彼女の不穏は夜勤職員をいつでも絶望的な気持ちにします。なぜならこの頃の彼女にはなかなか本当の気持ちに達する術がなかったからです。しかし、この夜の彼女、途方に暮れている職員の手を取って小指をこすり始めたのです。

「え！なに？」夜勤職員の頭がぐるぐる回ります。小指…えーっと…小指…そうだ！赤ちゃんゆび…赤ちゃん、赤ちゃん…そうだ！連想の輪がピタリと標準を定めることができました。

Dさんの三月までの担当職員は、出産のために退職しています。そして今は、九月、多くの職員がうっかり失念している出産予定日を彼女は覚えているようでした。

翌朝、夜勤職員は電話をします。「あのう？…赤ちゃん？…」退職職員から返事が返ります。「ちょうど生まれたところよ…」

重度の、視覚障がい併せ持った知的障がいの方が、なぜか小指を赤ちゃん指だと認識し、その名称を赤ちゃんの意味を伝えるために使い、そして半年も前のことをしっかりと覚えていて、出産予定日までを忘れないでいる、それをどのように理解していいのだろうか？今の私には、とても科学的には証明できない事柄のように思えました。

Dさんは、出産祝いを送ることを決めて、次の日にはすっかり熟睡できたのでした。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

そして、この夏。E男さんは、突然、父を亡くしました。すでに高齢の父であったけれど、癌で余命一年を宣告されてから一週間、十日後の死は、分かっていたこととはいえあまりにも突然のできごとでした。服を脱ぎ裸になり、強く爪を立てて職員にしがみつき、失尿に失便、やり切れぬ思いが彼を突き動かし続けました。朝食のパンをつまらせる誤嚥があり、息が止まり救急車が呼ばれました。蘇生はしたものの肺炎に肺出血、生死を彷徨った入院加療が続きました。あまり仲の良い父子とはとても言えませんでした。残された息子にとっては、抱えきれぬ思いが心を身体を傷め続けました。残された母のこと、何も助けることができない自分のこと、生前、父を責める気持ちを持ち続けた自分のこと、ありがたうもごめんなさいも伝えられないまま亡くなってしまった悔恨の重い…。

急いで仏壇が用意されました。亡き父の写真に、供花、そして思い出と父に寄せる思いを綴った手紙、全職員が仏壇の父に向かってその手紙を彼とともに読みました。

遠く離れていた父への思いが近寄せられた時間、仏壇がいつでも側にあることで、心も身体も父へ圧倒的に近づいたことで、彼の不穏は急速に消滅していったのです。

思えば、父親はじょうずに彼と付き合えない人でした。息子にまっすぐに思いを伝えることができずに、近づいたかと思えば何でも買い与え、そうかと思えば、照れくさそうに遠く離れて母子の様子を見ていたりしました。おそらく「好き」がじょうずに伝えられなかったんでしょう。しかし、今や父は、仏壇の中ではありますが、いつでも確実にそこにいる人になりました。逃げもせず、近づき過ぎもせず、ただそこにいます。

重度の知的障がいの方々つながりがそこにあります。すでにこの世にいないからこそそのつながりがそこにあります。

しゃべることができない彼らだからこそ感じるができる世界があるのだと私は信じています。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>